札響くらぶ

60

2012.10

【編集・発行/札響くらぶ】 064-0931 札幌市中央区中島公園1-15 札幌交響楽団事務局気付
メール：info@sakkyoclub.net
ホームページ：http://sakkyoclub.net/sakkyoclub/

札幌交響楽団がまちにあふれる音楽都市さっぽろに向けて（その1）

～上田札響くらぶ会長と小沢札響専務理事との対談～

平24年8月30日午後7時からホテルポールスター札幌において、札幌交響楽団専務理事小沢正晴氏をお招きして札響くらぶ会長上田文雄との対談を札響くらぶ副会長西川吉武の司会で行いました。内容豊富な対談の模様を今号と61号の2回にわたって掲載します。

○司会　札響の定期会員が2000余名、今後、会員拡大が好転する見通しというのも見えていない現状の中で、双方で何か運動を起すことが重要と考え、私たち札響くらぶもどのような貢献できるか、札響とともにステップアップしていきたいと考えています。大きなテーマですが、「札幌交響楽団がまちにあふれる音楽都市さっぽろに向けて」ということにしたいと思います。音楽都市さっぽろへの道筋を大胆に語り、どのように発展させるかというような対談記事を載せることによって、私ども札響くらぶ会員にも、市民の皆さんにも訴えていきたいなというのが今回の趣旨です。

テーマにこだわらず自由に語っていただけると嬉しいです。それではよろしくお願いします。

上田札響くらぶ会長

最初に札響くらぶ会長から

○札響くらぶ会長　札響くらぶをはじめる時、最初どんな気持ちでいたか？　札響を取り巻く環境は、定演が厚生年金会館から札幌市民会館に移り、それでも空席が目立つ状況。そんな中で1年後にキタラホール2008席ができる、素晴らしホールだと聞いていましたから、ガラガラだったらどうしょう、どうしても満席で札響を聴きたいという思いからの出発でした。当時も札響の名前は市民に浸透していましたが、悔しいことに「札響なんか行かない」というような市民の雰囲気があったように思います。僕は、こんなに素敵な音楽集団なのにどうしてなのか考えました。やっぱり札響の役員、楽団事務局そして楽団員も含めてオーディエンスに向きあっていないのではないか？

市民・聴衆にとって「私たちの札響」というふうに思える関係が結ばれていなかった、そう思えたのです。市民の意識として「私達のまちのオーケストラ」になってもらいたい、市民も楽団事務局も楽団員も、同じ思いを持てるよう変わっていくというテーマから始まりました。ですから札響くらぶは札響ボランティアとしてお手伝いもしますが、単にボランティア活動をするだけではなく、楽団事務局や楽団員と市民・聴衆の関係を「一緒に音楽をするという意識」になれるような接点を形成していきたい、そんな思いからです。具体的には「札響くらぶ」という会報を定期的に出して指揮者と楽団員をしっかり紹介することで、音楽家と市民のパイプ役になる、楽団員と札響くらぶ会員との交流会を開いて、聴衆・ファンの想いを楽団員に理解してもらう、そんな取りくみから始めたのです。そういう活動が定期会員を増やすという結果になればと。

札響専務理事から

○札響専務理事　最初に上田会長から札響くらぶの設立経緯や、今までの札響に対するいろいろなお言葉を、本当にありがたいと思いながら聞きました。これからも、札響くらぶのいろいろなお力をおかりしたいなというふうに率直に

（次ページへ続く）

札響くらぶの活動がより広く、確かなものにするために
札響くらぶ会員の拡大の取組みにていて

札響くらぶの会員は750名を超えた時期もあったが、その後漸減しながら現在は460名前後に落ち着いています。

札響くらぶコンサートを復活する際に会員数の検討がなされ、安定した開催を望めるのはキタラの座席数に匹敵する2000名が必要とされました。

確かに大きなイベントの開催や札響を応援する際、それに参加する人たちの動員が会員だけでほぼ達成できるような活動ができることが理想といえます。

そこで、札響くらぶの会員を拡大する取組みとして、まず、札響くらぶの活動が何よりも魅力あるものしなければならない、そしてその活動を広く発信していかなければならない、として次の活動を始めますので、会員の皆様にもご協力をお願いします。

◆会報への投稿を呼びかけ、会員の活動への参加を促します。

◆「札響くらぶアカデミー」「JOFC札幌総会」の会員以外の参加など可能とします。

◆茶話会や札響くらぶアカデミー（仮称）などだれでもが参加でき、気軽に話ができる場を設けます。

◆札響との懇談会など情報交換を、会員や団員、事務局が参加しやすい雰囲気をつくります。

◆会報発送の際に『会員募集』のチラシを入れ、会員に知人・友人を誘って貰うこと、ファミリー会員、定期・維持会員など募集などを実施します。

◆札響くらぶ会員募集チラシは札響くらぶのデスクに置く。また、入会案内パンフレットのメールアドレス、URL等変更箇所の訂正シールを作成します。

◆札響の地方公演の際、主催者の承認が得られれば、開催地の会員が主体となってサービスデスクを設置して新規会員募集を行う。必要があれば運営スタッフが応援します。

◆札響くらぶ会員と定期会員の違いをアピールする、楽譜支援について一般や団員に知られていない、贈呈式の実施など札響応援をもっとアピールします。

今回は、ファミリー会員への入会の奨励、友人・知人の札響くらぶ紹介と入会をお誘いすることをお知らせすることにし、入会案内チラシと入会申込ハガキを作成し、同封しましたのでご協力をお願いします。

（事務局長　武藤義典）

（前ページより続く）

思っております。

今思いますのは、２００２年に経営破綻がありましたが、札響くらぶや、個人の方、企業の方、いろいろな方々から御支援をいただいて、何とか立ち直ることができて、昨年50周年を迎えることができました。現在の経営状況については低空安定飛行といいますか、そういう状況かなというふうに思っております。

今の時代、これからも安定的な経営状況をどう継続させていくのかというのが一番頭の痛いところです。私がポイントを置いているのは、定期会員を増やすこと、それとパトロネージュの企業、団体、個人を増やしていくこと、そのあたりになってくると思います。そのために一番大事だと思っているのは、聴きに来てくださる方へのきちっとしたサービス精神、それから、いろいろな個人、企業、団体の方へのパブリシティー、それからセールス、これらはどこまでやってもこれで充分という状況はないと思っております。

定期演奏会などで私はキタラの出入口で、お迎えとお見送りをしていますけれども、お客様から、今日は本当に感動したとか、色々な感想を直接聞ける機会というのはとても大事だと思っております。そういうことが、少しずつでも経営の安定とか、リピーターの方を増やすとか、定期会員の方を増やすとか、パトロネージュを増やしていくことにつながっていくのだろうと思います。財政的に一気に収入が増えるというような方法はないと思っています。

小沢札響専務理事

先ほど上田会長もおっしゃいましたけれども、どのようにして定期会員をはじめとするお客様を増やしていくのか、これはとても大きな問題ですが、「キタラファーストコンサート」（注1）というのはとても有効な事業と認識しております。このコンサートを聴いた子ども達の中から、将来、楽団員になったり、あるいは、定期会員になってくれたりするのだろうと思っております。ただ、「ファーストコンサート」でいらっしゃる小学校6年生の方たちが、中学生、高校生になった時に、「セカンドコンサート」というのではないのですけれども、有料でもいいから次に提供するコンサートはないのかなと思っています。子供たちがこんな立派なコンサートホールで、こんな名曲を聴いたことは、きっと生涯印象に残ると思うのです。だから、そういう気持ちを途切れることなく、次の機会をつくれないかという気持ちがあります。ちょっと話はばらばらになりましたけれど、サービス精神、セールスする気持ち等々、そういうところに非常に関心があって、いま私自身専務理事の立場として思うことです。

注1：「キタラファーストコンサート」～札響くらぶの政策提案が実現し、2004年から札幌市内の全小学6年生を対象に毎年開催しており、「世界のキタラで指揮は音楽監督や正指揮者と札響の音楽を子供たちが聴く」というもので、札幌市と札幌コンサートホールが主催しており、既に10万人を超える小学生が聴いている。その取り組みは札幌近郊の市町村まで広がっている。

音楽をきずなに協働することで、新しく生まれるものがあるのでは？

○札響くらぶ会長　経営破たん寸前まで札響がいったとき、再建委員の一人として色々提言をさせていただきました。そんな中から幾つか楽団員の皆さんによる「改革」も生まれました。定演が始まる前にロビーコンサートが行われるようになったり、終演後聴衆を見送るため楽団員のラインが出口にできるようになりました。定期演奏会ならではの光景です。定期会員を大切にする楽団事務局・楽団員の努力は、多くの会員や聴衆から支持を受けていると思います。特に見送りのラインは是非多くの楽団員が参加してくれることを望みたく思います。今日の演奏を聴いた聴衆がどんな顔をしてホールを後にしようとしているか、ステージの上からだけではなく身近に感じていただきたいと思います。拍手からだけではなく、聴衆の一人ひとりの表情だとか、満足の度合いをあるいは感動の共有を確認する作業をしようとしている楽団員の姿に、聴衆の札響への親しみと新たな期待を生むことになると思います。定期会員をはじめ聴衆を大切にする雰囲気が札響の魅力になると思うのです。

○札響専務理事　お見送りをする時、お客様から本当にいろいろな声が聞けます。お見送りをする楽団員たちに声をかけたり、一緒に記念写真を撮ったり、お客様が非常に喜んでいただいていますね。コンサート後の余韻を共有できるのはいいことですね。私は、お見送りの時に聞けたお客様のことばは、楽屋に帰った時に楽団員に会えば必ず伝えます。「今日のお客様はみんなすごく喜んで帰りましたよ」と。そうしたら楽屋でも楽団員がとても喜ぶのですね。それを直接、直に聞いてほしいですよね、本当は。

○札響くらぶ会長　「おもしろい声聞けるよ」っていうふうにね。

○札響専務理事　やっぱりそういう生の声を聞くチャンスというのは非常にうれしいことです。いろいろなことに役に立ちます。今度、応援しようかということもきっとあると思うのです。やっぱり地道な努力ですよね。キタラにくるとファンになる方がかなりにいらっしゃると思うのです。どう開拓していくか様々なアプローチがあるのだろうなと思っています。

○札響くらぶ会長　それと、多くの情報発信力のある方々になるべくキタラで札響を聴いてもらう努力をするべきだと思います。

例えば、キタラに横づけして客待ちしているタクシーが沢山います。私も何度か利用し、その度に運転手さんに、「中に入ったことがありますか？」、「札響を聴いたことがありますか？」と聞くのですが、「ない！」というのが答えです。札幌の名所はどこだといったら「キタラですよ！」と言える人をね。札響はすごいというメッセンジャーを沢山つくるべきだと僕は思うのです。いろいろな角度から種まきをしていかなければならないと思うし、観光事業者の方々も、キタラを、札響を、体験したことがあれば自然にお客様に紹介し、札響を広める役割を担ってくれると思います。

○札響専務理事　ボランティアセールスマンですね。例えば広告会社の方たちも、まだコンサートには来ていない方がいると思いますね。

○札響くらぶ会長　いろいろな各界階層の方々に、例えば札響自身の広報活動という位置づけで入場料負担を軽減し、あるいは業界団体がスポンサーになって、業界に従事している職員の皆さん向けのコンサートを開く、それは業界の文化度を上げることになり損はないはずです。学校の先生方にも、もっと札響を聴いてほしいですよね。

キタラが出来た経過から見ても、キタラにとって大切なのは札響とＰＭＦです。だから札響の事を考える際にも、キタラとＰＭＦをどのように活用するかを十分に関連付けて考えなければなりません。札響から見てキタラホールに札響を応援する気分にさせ、支援体制をどれだけとってもらえるようにするか、そのことが重要だと思います。例えば、キタラクラブに５０００人ぐらいかな？会員がいます。会報に札響のことやＰＭＦのことをもっと書いてほしい。会報を読んでいると、キタラにとって札響が、ＰＭＦが、いかに大切なものなのかという問題意識が薄まってきているのではないか。こういう問題意識を他の市内の公共ホールにも広げていくことが、札幌全体の音楽文化のなかで札響の役割の重要性を確認し、札響を盛り上げていくことになると思います。同時に札響も市民にどういうサービスを提供すればよいかの答えも出てくるのではないかと思います。

（次号に続きます。次号のテーマは「音楽都市さっぽろを目指す、さっぽろ元気づくりのために！」です）

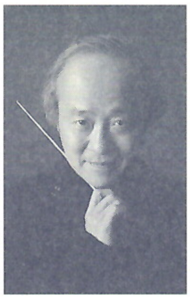
11月〜1月の定期・名曲シリーズ

演奏会を楽しく聴くために

八木幸三（札響くらぶ会員）

第554回札響定期演奏会

11月9日（金）A日程　19：00
11月10日（土）B日程　15：00
札幌コンサートホール Kitara
大ホール
指揮／尾高　忠明（音楽監督）
ピアノ／ジョン・リル


音楽監督　尾高忠明 ©Martin Richardson

ジョン・リル ©Sophie Baker

■ベートーヴェン／ピアノ協奏曲第5番変ホ長調「皇帝」

この曲が作曲されたころ、ナポレオンの軍隊がウィーンに迫っていた。しかし、ベートーヴェンは作曲を続け、1809年に曲は完成される。題名「皇帝」はナポレオンを意味するものではもちろんなく、作曲者自身がつけたものでもない。ナポレオンのフランス軍兵士が、この曲を聴き「皇帝だ、皇帝万歳」と叫んだという逸話も事実に反しているようだ。しかし、この曲は、冒頭にいきなり独奏ピアノがカデンツァ風に弾きまくる豪快な第1楽章、優美な主題を持つ第2楽章、そして強烈なエネルギーがほとばしる第3楽章と題名どおりの風格に満ちた傑作であることは万人の認めるところであろう。

■エルガー／交響曲第1番変イ長調

尾高・札響のエルガーは、もはや一級ブランドではないだろうか。これまでに交響曲第3番やチェロ協奏曲を聴き大きな感銘を受けてきたが、今回はエルガーが50歳という円熟期に書かれた最初の交響曲が聴ける。8歳年上のアリス夫人の献身的な支えの中で、彼は作曲に集中し1908年に完成した。初演は、ブラームスの交響曲第2番を初演したことでも有名なハンス・リヒターの指揮、ハレ管弦楽団の演奏で大好評を得た。英国初演のあと米国、ロシアなど演奏は拡大され初演から1年間で百回近く演奏された。イギリス人にとってエルガーの交響曲第1番と第2番は特別の曲で、この曲が演奏されると三千席をほこるロイヤス・フェスティバルホールが、いつも満席になると言う。エルガー・メダルの受賞者尾高忠明のタクトは、この曲の神髄を伝えてくれることだろう。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

森の響フレンドコンサート

札響名曲シリーズVol.4
音楽が紡ぐ物語「古典神話の主人公たち」

11月25日（日）15：00
札幌コンサートホール Kitara
大ホール
指揮／ラドミル・エリシュカ

首席客演指揮者　ラドミル・エリシュカ ©Masahide Sato

■ベートーヴェン／バレエ「プロメテウスの創造物」序曲

「ベートーヴェンが、バレエ音楽なんて作曲していたのかな〜」と思われる方も多いのではないか。彼は、生涯で2曲のバレエ音楽を書いた。はじめに書かれた作品は、ボン在住時代にプライベート的に依頼された10分ほどの作品。交響曲第1番が完成した直後の1800年につくられたこの作品は、イタリア出身の振付師サルヴァトーレ・ヴィガーノと組んだ本格的なものだ。今では、バレエを伴った全曲が演奏されることはなかなかないが、序曲は頻繁に演奏されている。力強い総奏にはじまり壮麗な旋律による導入部とそれに続く主部は、快活な楽想が繰り広げられ実にベートーヴェン的だ。

■ハイドン／交響曲第88番ト長調「V字」

「交響曲の父」と呼ばれるハイドンは生涯で107曲の交響曲を残した。

「V字」という題名は、作曲者がロンドンで交響曲シリーズを出版した際、第2集に23曲を集めA〜Wまでのアルファベット文字を番号代わりにつけ、そのVにあたるためだ。この曲は、第1楽章や終楽章の主題がこの曲の特徴を端的に表し、その主題に基づく各部の構成も巧みで、ハイドンの交響曲の中でも第92番とともに最も円熟したつくりを見せている。堂々とした序奏から弾むような主題や弦楽部と木管楽器の対比が楽しめる第1楽章やオーボエが優雅な旋律を奏でる第2楽章、民族舞曲を感じさせる第3楽章、そして再び歯切れの良い快活なフィナーレとへむかう。

■モーツァルト／交響曲第41番ハ長調「ジュピター」

ご存じモーツァルトの後期三大交響曲の中でも名曲中の名曲が「ジピター」だ。「ジュピター」という副題は、作曲者自身がつけたものではないが、ローマ神話の最高神の名の通り、その典雅で堂々としたこの作品にふさわしいものだろう。

第39番、第40番と共に、1788年の数ヶ月の間に一気に書かれたと言われているが、それぞれまったく異なる性格の名曲を同時に集中して作曲したモーツァルトは、まさに神童そのものなのだ。

この頃の彼は生活も困窮し、予約演奏会の集客もままならない時期に何の目的でこれらの曲がつくられたのか確証はない。さらにモーツァルトの生前には、一度も演奏されていないのではないかという説もある。こんな謎があるのも実にモーツァルトらしい。

三大古典派音楽家の作品が、エリシュカの経験豊富なタクトからどう紡ぎ出されるのか、大注目のプログラムだ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第555回札響定期演奏会

12月14日（金）A日程　19：00
12月15日（土）B日程　15：00
札幌コンサートホール Kitara
大ホール
指揮／アレクサンダー・シェリー
クラリネット／セバスティアン・マンツ

アレクサンダー・シェリー ©Thorsten Hoenig

セバスティアン・マンツ

■パリー／ブラームスによせる哀歌

十九世紀後半から二十世紀初頭にかけ活躍したイギリスの作曲家、音楽学者であるヒューバート・パリーはイートン校在学中に作曲を学びピアノやオルガン演奏および作曲活動を始める。オックスフォード大学で音楽教授を務めた後、ロイヤル音楽カレッジ校長となる。バッハ、ヘンデルの影響を受け、特に宗教音楽では、オラトリオや合唱曲を多く残している。ブラームスが亡くなった1897年に作曲されたこの曲は、ブラームスのモチーフを生かしながら、彼の死を悼むかのような悲愴感溢れる曲想でイ短調により叙情的に奏でられる。

■ニールセン／クラリネット協奏曲

シベリウスとニールセンは、同時代に同じ北欧で活躍した重要な作曲家だが、日本ではシベリウス作品に比べ、ニールセン作品は交響曲にしても演奏される機会は少

ない。彼のフルート協奏曲は、たびたびコンサートで演奏されるが、クラリネット協奏曲となるとどうだろうか。この曲は、作曲者が親しかったコペンハーゲン管楽五重奏団のクラリネット奏者、オーゲ・オクセンヴァドに贈呈されたが、技巧的に難曲のためオクセンヴァドは「ニールセンは、クラリネットの名手なのだろうな」と皮肉を言ったという。諧謔的な主題ではじまり中間部では、幽玄な緩徐部分を持ち単一楽章として構成されている。

■ブラームス／交響曲第1番ハ短調

ベートーヴェンを意識しドイツ音楽の真正なる後継者をめざしたブラームスが、ベートーヴェンと同等かそれ以上の交響曲を書くために二十余年の歳月を費やして作り上げたのがこの第1番である。この曲は、確かにベートーヴェン風の交響曲である。悲劇的・闘争的なハ短調で始まり、最後の楽章はハ長調で終わるという「暗黒から光明へ」という「運命」的構成、第1楽章の短い基本動機からの発展、第4楽章の「歓喜の歌」を想起させる旋律など理由はいくらでもある。しかし、この曲はまさにブラームスそのものの楽想なのだ。曲全体は、北ドイツ人らしい暗さと深さを最後まで持ち続け、ブラームスらしい意図的にずらされた拍とフレーズがある。この曲を43歳にして完成させたブラームスの苦悩とあきらめ、さらには喜びという人生の深遠が彼自身の人間味と重なって創出される。

平成24年度の年会費の納入をお願いします

平成24年度の「年会費の納入のお願い」を郵便振替ご利用の会員の方にをお送りしております。

年会費は、札響くらぶの運営経費と楽譜支援金にあてられております。まだお振り込みされていない方は、お近くの郵便局からお早めにお振り込みをお願いいたします。

また、年会費納入の際に、任意での追加楽譜支援金も併せて募集しておりますので、お振込みの際、ご検討をよろしくお願いいたします。

年会費のお振込みに関するお問い合わせは、

電話・ファックス／〇一一-五六三-六四六〇

メール／info@sakkyoclub.net

までお願いいたします。

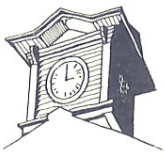
上記のほかに、定期演奏会、名曲シリーズの会場の「札響くらぶサービスカウンター」で、現金でのお支払いも受け付けておりますので、お気軽にお申し付けください。

（担当／事務局長　武藤義典）

札響物語 59

札響の50年を振り返る（4）練習場（1）

竹津宜男（札響くらぶ会員）



札幌交響楽団が誕生した1961年頃は日本中のプロ・オーケストラが日常的に練習場で苦労していた。その後も長年にわたって練習場対策は解決されなかった。そんな中で札幌交響楽団は創立以来練習場の環境に恵まれてきたと言われている。

創立当時は、中島公園の中にある旧中島児童会館（1949年に日本初の公立児童会館として誕生、現在のは1976年に完成、人形劇場こぐま座も同時に誕生）のホールが練習場だった。創立当時の2管編成55人のオーケストラには練習場としてちょうど良いサイズだった。

しかし、同じ時期に現在のパークホテル（1964年落成、最初はホテル三愛と呼ばれた。）の建設工事が始まった。基礎工事の掘削による砂埃が飛んで来るため真夏も二重窓を締め切って汗みどろになりながらの練習だった。締め切ったはずの二重窓の隙間からは目に見えない砂埃が忍び込みトロンボーンは練習が始まって30分程でのスライドがジャリジャリし出しスライドは絶えずコッピに入れた水で洗わなければならなかった。トロンボーンに限らず我々管楽器族は大きく息を吸い込むため吹き始めてしばらくすると口の中がざらついて口をすすぎたくなった。

ホールなのに暖房は家庭用の貯炭式ストーブが2台置いてあるだけだった。真冬はガンガン燃やすさなければ足元の水も凍るほどで、ストーブに近い人は汗を流しながらの練習なのにストーブから離れた場所に座っている我々管楽器族は非常に寒かった。気温が下がると管楽器は音程が下がるため楽器に各自のオーバーを掛けながら練習していた。身体や膝が冷え切って休憩時間になってもすぐには立ち上がれない程膝が固くなっていた。

また、このストーブは壁から空に向けた煙突よりも横に張った円筒の方が長かったために煙の吸い込みが悪く中に溜まったガスが時々ボーンと破裂して周りの人の頭の上に煤煙を降らせることも再三あった。

楽しみは、まだ地下鉄工事が始まる前だったので冬の中島公園の池は厚く凍ってアイス・スケートリンクになり昼休みや練習終了後などにスケートをすることが出来た。

日本のほとんどのオーケストラが練習場を求めて年中移動しなければならないジプシー状態と言われていた頃固定した練習場で練習出来て幸せなオーケストラだと言われていた。楽譜庫は無かったがホールのステージが楽譜整理の場所になり、創立の時に都民交響楽団から贈られたたくさんのオーケストラ楽譜（編成の大きなフランス物が多かった）の置き場と整理の場所になっていた。

1967年にはHBCの本社屋の増築が完成、それまで大丸藤井ビルの5階にあったラジオ局が本社に合体した。空いたHBCのラジオ局のスタジオをブチ抜いて練習場に変身した。楽譜庫には二重ガラス窓でスタジオと仕切られていた元副調整室が当てられた。この練習場には5年間お世話になった。街のど真ん中にオーケストラの練習場があることに客演する指揮者や共演者驚き「信じられない贅沢なオーケストラ」だと言われた。確かにそのとおりで周りに飲食店がたくさんあるため楽団員の昼食や晩飯などは、お金は掛かったが次は何にしようか、と楽しく毎日を過ごしていた。また、周りがデパート街なので買い物や練習曲順による空き時間の過ごし方には退屈する事がなかった。とは言え、練習・本番の度に酷い目にあっていたのはステージ・マネージャー海藤正吾氏ほかのステージ・スタッフだった。1951年落成のビルは人を運ぶためだけの古いエレベーターが付いていてサイズが小さ過ぎてティンパニィなどの大型楽器は中に収まらず搬出入の度に5階まで続く螺旋階段を担いで上り降りしなければならなかった。また、最も交通量の多い南1条通りに楽器運搬トラックを長時間横着けするため毎度身の縮む思いもしなければならなかった。練習場に入れたフル・コンサート・グランド・ピアノもピアノ屋さんが2人で担いで5階まで螺旋階段を上げたものである。

（つづく）

札幌市内中学校吹奏楽部札響定期演奏会招待事業（6・8月）

演奏を聴いた中学生からの手紙

財団法人札幌市職員福利厚生会協賛事業

6月は西岡北中学校、中の島中学校、藻岩中学校の3校、8月は新琴似中学校を招待しました。聴いた中学生の皆さん送られてきた手紙には札響の演奏をまじかに聴いた率直な感想や感動などが伝わってきて、思わず目頭を熱くなり、この事業をやって良かったとの思いを強くしました。これを機にお一人お一人が感性をさらに磨かれるとともに、将来の札幌の文化の担い手になってくださればこの事業は大きな成果を上げることになり、将来が楽しみです。

今回は中の島中学校と新琴似中学校の皆さんからいただいたお手紙の一部をご紹介いたします。紙面の関係で前文など一部を省略するなどの編集をしていますのでご了承ください。

中の島中学校（6月）

私たち吹奏楽部では使うことのないさまざまな楽器の音を聴くことができ、さらに音楽の楽しさを知ることができました。

「ボレロ」は私が楽しみにしていた曲の一つですが、それぞれの楽器の音が伸び伸びとしていて終わりが近づくにつれての音と動きの一体感が印象的でした。

素敵な演奏を本当にありがとうございました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

音の響きも良くて音圧もすごくて、音もびっくりするほどきれいでした。

急に音が小さくなるところや急に音が大きくなるところがとてもはっきりしていてすごいなと思いました。一つひとつの曲の演奏が終わるにつれ鳥肌が立ちました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

管楽器と弦楽器が合わさるとこんなに美しい音色になるんだ…と思いました。私は小さい音が苦手なので勉強になりました。

フルートとピッコロの重なりあいがとっても美しくて、私が今苦戦しているところだったのでとても参考になりました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

プロの方々の演奏を聴くことができて本当に勉強することがたくさんありました。

特に最後のボレロは、最初すごく小さく始まったのに最後はとてつもなく大きくて、その音量の差がすごいなと思いました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

私が特に感動したのは「ボレロ」です。私はトロンボーンをやっているのですが、ソロのメロディの時のとてもきれいな音色にびっくりしましたし、あんなに聞こえるような大きな音で音が割れないというのには感動しました。

これからあのトロンボーンの音色や全体の音を思い出しながらあんな音が出せるように頑張りたいです。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

演奏が素晴しくて行って良かったと思っています。高い音はキンキンしなくてきれいな音で、私にはできないのですごいと思いました。

一番すごいと思ったのは「ボレロ」です。音の強弱がはっきりしていて、変化がわかりやすかったです。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ボレロの強弱はとても圧巻でした。また聴きたいです。

P.S. 玉木さん、また今度チューバを教えに来てください。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

どうしたらあんなにうまくできるのだろう〝すごいな〜〟と思うことがいっぱいありました。優しい、気持ちが良くなる、体が揺れるような曲もあって…。

楽器の中で特にフルート、オーボエなどの木管が体が揺れていて楽しんでノリノリに吹いているように見えました。皆さんのようになるのが夢です。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

すごい演奏でした。特に最後の「ボレロ」が一番楽しかったです。

最初のソロは「あぁ知ってる曲だな。音が小さいのに迫力が出ていてすごいな。」と思っていました。でも、最後の方の盛り上がったところはただただ〝すごい！〟と思いました。

特に最後のシンバルの音が良くて、どうしたらそう出せるのか研究したくなりました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

素晴しい演奏を聴けてすごく勉強になりました。皆さんノリノリで吹いていて私もまねして行きたいと思いました。皆さんの演奏を見て聴いて、すごく勉強になりました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

私は後ろの席に座っていたのですが、音の強弱も分かるくらいのきれいな音が聞こえてきてすごいなと感動しました。

どの演奏者も一人で大きく響きのある音で、こんなに広い会場でどうしてこんな音が出せるんだろうとおどろきました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

中の島中学校吹奏楽部は8月のコンクールに向け練習中ですが、私を含めたみんながこの定期演奏会で何か学べたのではないかなと思います。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ボレロ」の強弱の違いがすごくて「私もあの技術を持ちたい」と強く思いました。

ヴァイオリン等の弦楽器の弓の動きもみんな揃っていて〝さすがプロだ！〟と思いました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

最後の「ボレロ」は感動しました。最初の方は本当に小さくて、でもしっかり響いて聞こえていて、中間にソロからヴァイオリンが入ってメロディを、最後はもう迫力がありザンと終わった時思わず鳥肌が立ちました。本当に最高の演奏でした。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

スネアドラムがずっと同じテンポをキープしているのがとてもすごいと思ったのと、ピッコロトランペットの音を初めて聴いたのですがとても高くてびっくりしました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ボレロ」の後半でトランペット?らしき高い音の楽器を吹いていた人、すごかったです。ソロを担当した人全員すごかったです。また聴きたいです。きっと聴きに行きます！

新琴似中学校（8月）

生のオーケストラを間近で聴き、音の美しさや臨場感を感じることができました。

私個人としてはチェロの音色とチューバのソロに感動しました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

私が一番印象に残っているのはトランペットの響きが「パーン」と会場全体に広がっていったことです。私もこんな音が出せるように頑張りたいです。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

印象に残ったのはフルートの美しい響きです。私もフルートを吹いているので近づけるように頑張りたいと思います。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

札響のフルートの方の音色はとても豊かで優しく包み込まれているような感じがしました。私もその音に少しでも近づけるよう練習して行きたいです。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

皆様の作りだした音、一音一音が心に強く響きました。その曲一つひとつの感情や強弱などがホール全体を包み込み、聴く人に感動を与えてくれました。そんな素晴らしい感動をありがとうございました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

私たちは吹奏楽をしていますが役立つところ、見習うところがたくさんあったので、生かしたいと思います。ありがとうございました。

インタビュー
アンサンブル・エルヴェ

7月30日、エルプラザミーティングルームにて札響くらぶスタッフ4名はアンサンブル・エルヴェのメンバーの方々にインタビューをする機会に恵まれた。まず最初の質問はエルヴェという言葉の意味から。エルヴェとは、フランス語。バロックダンスの用語で上に伸びあがるという動きをエルヴェといい、そういう動きを目指していこうとのことでエルヴェと名づけたとのこと。

インタビューの様子

アンサンブル・エルヴェ結成のきっかけは、顧問である札響チェロ奏者の文屋氏がある演奏会をやるにあたり、選りすぐりのメンバーを募り、そしてそのメンバーで定期的にやっていこうと結成したとのこと。コンサートマスターは同じく札響の佐藤郁子氏。

メンバーのほとんどは北海道教育大学出身者。アンサンブル・エルヴェ顧問、札響チェロ奏者の文屋氏が札響に入団した当初は、札響でさえ一般にはプロと認識されていなかった。現在は勿論プロの演奏家の団体と評価されてはいるが、札響以外の演奏家はまだまだプロと思われていない節がある。とくに教育大学の卒業生は音楽大学と同様に演奏家として教育されているにも関わらず、名称が音楽大学ではないとの事でアマチュアと思っている方も多く残念な事である。

年に1回定期演奏会を行っている。コンサートで演奏したい曲の多くがレンタル譜のために、元々は弦楽合奏ではない曲を自分たちでアレンジをして演奏している。その為にエルヴェ独自の楽譜をもっているとのこと。得意な曲はスーク、チャイコフスキー、ドヴォルジャーク、ブラームス。

コンサートマスターの佐藤氏は、8年という年月で培われた信頼関係があるからこその率直な意見のやりとりが練習ではおこなわれている、と話す。

編成は4-3-2-2-1が基本だが、曲によってはもう少しメンバーが必要な時もある。定期的に演奏活動をおこなっているプロの弦楽合奏団は、他に現在北海道には無い。これからももっと広く知ってもらえるように活動を続けていく。また、通奏低音をパイプオルガンで行なっていたのが、使用出来る移動式オルガンが無くなり、これを探すのも急務の課題になっている。

今後も、もっと良い演奏を目指し、自分たちの活動を後押しして頂けるように常に上を目指して進んでいく団体になりたい、と語るメンバーの方々。常に高みを目指す高いプロ意識を肌で感じられた。

次回の定期演奏会は平成25年3月11日にサンプラザホールで開催予定。アンサンブル・エルヴェがどういう演奏をするのか知るには、聴いていただくのが一番。

演奏会のお問い合わせは、オフィス・ウン(011-612-8696)

また、アンサンブル・エルヴェには後援会がある。後援会のお問い合わせは、090-4875-3675(アンサンブル・エルヴェ)(華)

第72回OKUMIGAKUギャラリーコンサートとAQUA+Quartetデビューコンサートを聴いて

9月9日、16日(日) 奥井理ギャラリー

藻岩のふもとは今日も雨だった！ 先週の武田芽衣さんを迎えてのコンサートに続いて、2週連続の奥井理ギャラリーである。

近くミュンヘンに旅立つという芽衣さん、これまでカメラータなどのアンサンブルでは何度か聴かせていただいたがソロは初めてである。これは聴き逃せない！と土砂降りの雨がようやく上がった午後、出かけて行った。

テラス一杯に広がる緑をバックにバッハの無伴奏から穏やかに始まる。続いてラヴェル、プロコフィエフ…豊かな低音域の響きがたくましくて素敵だ。大好きなピアソラのタンゴも！ピアノの森吉さんとのやりとりが小気味よく、芽衣ワールドにすっぽり包まれた。

そして今日は、その武田さんとデュオを組む岡部さん、それに織田さん、さらに札響に5月に入団した注目のヴィオラの青木さんとのクァルテットだというのだから、これもまた雨でも聴きに行かねば！である。

1曲目のモーツァルト、岡部さんののびやかなメロディにヴァイオリンとヴィオラの息の合ったユニゾンが美しい。きれいなトリルが高音から低音へと渡されていく。小鳥が歌い呼び交わしているようでテラスの木々に目をやる。

メンデルスゾーン、溜息のような歌からまるでドラマの展開のように次第に熱を帯びる弦。この空気を含んだような響きが好きだ。最後はトルストイも涙したというアンダンテカンタービレ。美しくのびやかな歌の後、速いパッセージがぴったり重なり、まるで一つの楽器になって駆け抜けていく。ブラボーと声がかかり満場の拍手。

青木さんがマイクを手にする。5月からリハーサルを重ねたとのこと。互いの音楽性を刺激しあう密度の濃い音のやりとり…羨ましい時を過ごされたに違いない。今日やっと一つになれたかな、と言う青木さんの顔が、そして見合わす4人の顔が満ち足りていた。

外に出たら雨は上がっていた。先週ご挨拶に立たれたギャラリーの奥井さんが、なぜかコンサートの日は雨が多いのだけれど不思議と終わるころには上がっているんです、とおっしゃっていたがその通りになった。雨上がりのさわやかな空気の中、弦を頭の中に響かせながら藻岩を後にした。(静)

Webでのチケット購入について

今年8月1日からキタラチケットセンターのサービスが変更となり、予約チケットをお近くのセブンイレブン店舗で受け取ることができるようになりました。

さらに、キタラのホームページから予約することも可能となりました。チケット購入にでかけていかなくても、ご自宅でホームページから予約し、お近くのセブンイレブン店舗でチケットを受け取ることができるようになり(手数料はかかります。)、大変に便利になっています。しかし、この新しいサービスでは札響くらぶ会員特典が適用されませんのでご注意ください。

札響くらぶ会員向け割引(札響定期演奏会の各1回券(学生除く)、名曲シリーズのS席1回券が10%引き)でのご購入は、これまでどおりキタラチケットセンター、大丸プレイガイド、道新プレイガイドの窓口をご利用ください。

(事務局長　武藤義典)

ハイメスオーケストラとは

北欧音楽のスペシャリスト新田ユリ氏の指揮によるシベリウス交響曲第2番が雄大に終ると、ギッシリ満員のホールはブラボーと喚声に包まれた。ステージにも客席にも満たされた顔、顔。そしてアンコールへ。こうした感動の中で第1回ハイメスオーケストラコンサートは大成功のうちに幕を閉じた。

いうまでもなくオーケストラは、音楽活動のなかで基幹的地位にあるもので、今日の北海道の高い音楽レベルは、51年前の札幌交響楽団の誕生と無縁ではない。音楽団体としてハイメスがオーケストラを持つことの意味は、ハイメスの音楽活動をさらに活性化させるとともに、当会の社会貢献の輪を広げる上で大きなものがあると思う。

ハイメスのオーケストラ事業としては、2005年を第1回とする「道民・オーケストラワークショップ」を札幌市生涯学習振興財団、札幌交響楽団及び当会の3団体による実行委員会方式により、昨年まで6回実施した。この事業は、札響団員を始めとするプロ奏者とアマチュア奏者による混成オーケストラ、総練習の公開、独自の選曲、そして熱気溢れる演奏により、北海道にこれまでにはなかった新しいオーケストラシーンを提供してきた。この間、2008年には、ハイメス記念オーケストラとして演奏し、創立20周年記念コンサートの主役的役割を果たした。

このオーケストラの魅力は、ボランティア参加の、オーケストラを限りなく愛するプロ奏者の意地を感じさせる熱演と、これに触発されたアマ奏者の奇跡的な上達による、他のオーケストラでは見られない感動的な演奏であり、聴衆の皆さんからも大きな支持をいただいてきたことであった。

こうした実績の上に、200名以上のアーティストを擁するハイメスとしては、自前のオーケストラを設立する時期に至ったとの議論が煮詰まり、アーティスト会員を軸とする「ハイメスオーケストラ」をスタートさせることになったのである。

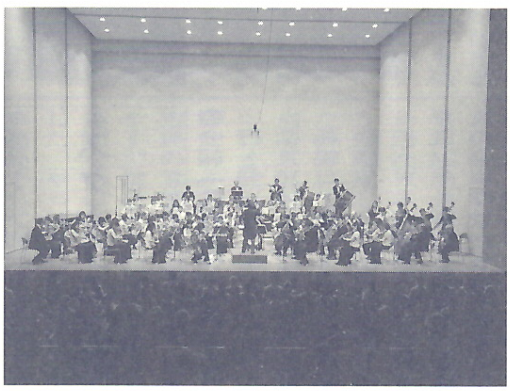
今回の選曲、ソリストの決定にも会員の希望を積極的に取り入れた。また編成上、会員以外のメンバーの方にも大きなご協力をいただいた。

共催団体としてご支援をいただいた(財)札幌市生涯学習振興財団様、(公財)札幌交響楽団様、ご協賛いただいたホクレン農業協同組合連合会様、北海道新聞社様、北海道銀行様、助成いただいた伊藤組100年記念基金様、プログラムの広告にご協賛いただいた各社様のご支援がなければ到底、実現できなかったことである。

北海道の音楽活動の可能性を拡げ、音楽ファンの皆さまの更なるご支援もいただきながら、「ハイメスオーケストラ」をご一緒に育てていただければ、というのが会員一同の願いである。

猛暑の中、来年夏の第2回目の企画を始めたところである。

NPO法人北海道国際音楽交流協会(ハイメス)事務局長　西村公男



Vol.1HIMES オーケストラ(2012.8.14ちえりあホールにて)

随想　本棚の隅から

夏らしい日が続くある日、窓からの日ざしが私を本棚へと誘う。

本棚の一段を古い音楽会のプログラムが寒いでいるので整理をしようと手に取ってみると、一九七〇年代と一九八〇年代のものがほとんどだ。

あのころ世界中から錚々たるオーケストラやプレイヤーが続々と来日していたことを豪華なプログラムが物語っている。

ウィーンフィルは七三年と八〇年にも聴きに行ったんだ。

レニングラードフィル（今はサンクトペテルブルグフィル）は七七年と七九年に聴いたのか…。

しばし感慨に浸る。

はらりと落ちた1冊、「オヤッ」と拾い上げたら、

「ヴァーツラフ・ノイマン指揮札響特別演奏会」

ヴァイオリン／ヴァーツラフ・フデチェック

A　ドボルザーク／序曲「謝肉祭」作品92

ヴァイオリン協奏曲　イ短調作品53

B　スメタナ／交響詩「わが祖国」から

〝ヴィシェフラート〟

〝ボヘミアの森と草原から〟

〝モルダウ〟

一九八五年六月二六日　北海道厚生年金会館

（一九七四年にチェコ・フィルハーモニー管弦楽団が来札した時もノイマン指揮でドボルザークとスメタナだった。）

表紙を入れてたった一二頁の薄いプログラムをパラパラとめくっていると中に茶色に乾いたスズランが一本挟んであった、何を語ろうとしているのか？。

私にも高度成長期からバブル期にかけて歩んできた豊かで華やかな長い青春があったのだ。

札幌の初夏の風が甘くさわやかなのは今も変わらない、ただ時の中を過ぎてきた私があるだけ…。

この何年かは札響の定期演奏会で満ち足りている。

公園の四季を愛でながら通う喜びを伴って…。

そのほかにも小さなアンサンブルやリサイタルなどがたくさん有り、ミニコンサートなどは演奏者と間近にお話しができるので、楽しみが尽きない時代になった。

（霞）

新規事業札響くらぶアカデミーは「札響くらぶサロン」として登場します。

今年度の新規事業として、5月の総会で承認された「札響くらぶアカデミー(仮称)」は、「札響くらぶサロン」として開講することに決定し、次のとおり実施します。

札響創設当時からの名演奏の録音を聴いたり、会員同士が語り合ったりするものです。

名曲喫茶「ウィーン」のご協力により開催します。

皆様の参加を心よりお待ちしております。

申し込みは、同封のハガキにて、締切りは第1回・第2回ともに11月22日（木）で、各回定員40人を先着順に受け付けます。

・第1回　2012年12月1日(土)

・第2回　2013年3月9日(土)

・1、2回とも午後4時～6時

ミニコンサートを聴いて

in Steinwey Studio Vol.3

8月7日（火）七夕の夜、井関楽器3階のスタインウェイスタジオでのコントラバス奏者文屋充徳さん（札響チェロ奏者文屋治実さんのお兄さん）を迎えてのミニコンサートに行って参りました。週末の札響第551回定期演奏会にゲスト奏者としての来札の機会でご出演されました。ボッテシーニ小品、ガイドシュのカプリッチョ第2番などがピアノ新堀聡子さんとで演奏され間近で聴く事、見る事？のできる「ミニコンサート」、同じステージに立っている感じになり、楽しいコンサートでした。

全曲暗譜されているのでしょう、楽譜を置かずに演奏されて、特に地鳴りの如く唸る低音には驚きと曲解説や作曲者ガイドシュとの作曲裏話など、文屋さんのトークが素晴らしく、音楽パーソナリティの持ち主で文屋ワールドに魅せられ引き込まれたあっという間の50分堪能して参りました。

文屋充徳さんは1950年代のお生まれとお聞きしましたが、エネルギッシュなコントラバス演奏には「青年」そのもので「団塊世代」とは思われない「迫力」でした。私は音楽音痴でオーケストラ演奏でのコントラバスは、聴くことがあるのですが、ソロ演奏は初聴験？なので、恥ずかしながら目の前のコントラバスの大きさにビックリ「ミニコンサート」の魅力に惹かれました。

開場すぐに前の席に座ったのですが、スタインウェイスタジオがいつの間にか満席になっていました。流石にコントラバス第一人者なんだなと、音楽初心者の私ですが感じました。

会場には札響のコントラバス奏者の助川龍さん（首席）、斎藤正樹さんがお見えになっていました。

今回の「ミニコン」は平日夜公演でしたが、通常は日曜日・祭日に午後2時からの公演で9月16日は札響クラリネット副首席奏者白子正樹さん、10月8日はチェロ奏者村上智美さん、12月24日は札響コンサートマスター大平まゆみさんの出演が予定されています。ちなみに入場料は500円で全席自由です。

第551回札響定演に、後方の席でしたが聴いて参りました。「ミニコン」での事前学習経験？のおかげで、文屋充徳さんが失礼ながら以前からの「ともだち」のように感じ親しさを持ちました。ファンの一人になりそうです。（なお）

スタッフの活動報告（平成24年7月～9月）

●会報「札響くらぶ」第59号発行・発送

7月10日（火）

札幌コンサートホール1階第2会議室

担当／木村運営スタッフ他6名

平成24年札響くらぶ総会、交流会、宮の森中学校からの手紙など12件の記事を掲載、900部発行、会員、札響関係、報道関係と宮の森中に70部、計約800部発送する。

●第4回札響くらぶ運営会議開催

7月10日（火）

札幌コンサートホール1階第2会議室

担当／武藤事務局長

「札響くらぶ会員の拡大の取組みについて」について、スタッフからの提案の検討、会報第60号の編集企画の協議、引き続き協議する。

●「アンサンブル・エルヴェ」をインタビュー

7月28日（土）

エルプラザ3階ミーティングルーム

担当／西川副会長他3名

弦楽アンサンブル「アンサンブル・エルヴェ」をインタビューしました。インタビューの内容は、10月発行予定の会報「札響くらぶ」第60号に掲載します。

●おしゃべりROOMデザイン一新

8月5日（日）

担当／武藤事務局長

札響くらぶHPのおしゃべりROOMのデザインを一新し、投稿を今年以前のものを削除ました。

●第5回札響くらぶ運営会議開催

8月6日（月）

エルプラザ4階男女共同参画研究室3番

担当／武藤事務局長ほか10名

「札響くらぶ会員の拡大の取組みについて」「会報第60号の編集企画」「中学生招待の現状の報告」の協議を行いました。

●上田会長との打合せ

8月9日（木）

札幌市役所10階市長室

担当／西川副会長ほか1名

札響小沢専務との対談開催提案などスケジュール調整を行いました。

●札幌市内中学校吹奏楽部札響定期演奏会招待事業

8月11日（土）

担当／佐藤運営スタッフ

(財)札幌市職員福利厚生会協賛事業として、新琴似中学校33名を招待、送迎バスは(株)そよかぜ観光が担当しました。

●上田会長と小沢札響専務の対談

8月30日（木）

ホテルポールスター札幌4階カトレア

担当／西川副会長ほか2名

「音楽都市さっぽろの実現を目指して」をテーマに対談を行いました。対談内容は会報「札響くらぶ」第60号、第61号に2回にわたって掲載します。

●第6回札響くらぶ運営会議開催

9月12日（水）

札幌コンサートホール1階第2会議室

担当／武藤事務局長ほか10名

「第6回JOFC総会in札幌」の運営、会報第60号の編集企画について協議しました。

●札幌市内中学校吹奏楽部札響定期演奏会招待事業

9月15日（土）

担当／佐藤運営スタッフ

(財)札幌市職員福利厚生会協賛事業として、清田中学校47名、東栄中学校40名、計87名を招待、送迎バスは(株)そよかぜ観光が担当しました。

●札響くらぶアカデミー開講打ち合わせ

9月20日（木）

エルプラザ2F打合せコーナー

担当／西川副会長ほか3名

名称、開講場所、開講方法、運営体制、PR方法などを協議しました。

編集後記

◆札幌で活躍している、「アンサンブル・エルヴェ」のインタビューに同席させていただきました。

直にあってお話をすると音楽家達は若々しくてとっても魅力的ですね。皆さんの音楽に対するひたむきな情熱に冷房を強くしたほどです。（霎）

◆今年度の新事業『札響定期への中学生招待』も前期が終了した9月で310名となりました。そして宮の森中学校に始まり中の島中学校・新琴似中学校の生徒さんからも心の籠った礼状が届き一同恐縮しています。後期もご期待に添えますよう活動して参りますので、皆様のご協力をお願いします。（里）

◆今号で60号となった。記念号として何か特集を考えたところ、小沢札響専務と会長の対談となりました。お二人の話が弾んで内容が盛りだくさんとなり、すでにほかの記事も決まっていたことから60号に収まりきらず、61号と分けて掲載することになり、連載となりました。次号61号は1月の発行予定です。（武）